

JAA通信

(Japan Autonomous Academy) 日本自治 ACADEMY 会報誌

Vol.17 2022年5月発行

(ホームページアドレス) http://japan-a-academy.jp/

[発行]

NPO法人 日本自治ACADEMY 北海道下川町西町88番地2(株)谷組内

郵便番号 098-1205

Tel:01655-4-2595

Fax:01655-4-2596

E-mail:info@japan-a-academy.jp

Contents

●表紙写真:P1

表紙写真には、当 ACADEMY の熊谷理事長が 蘭越町の小学校へ北海道マップパネルを寄贈した 模様を掲載しました。

●日本自治 ACADEMY 事業報告:P2~P3

設立 15 周年事業として取組んでいる「北海道の 公立小学校に北海道マップパネルを飾ろう!」プロ ジェクトについて、ご報告します。

●講話紹介:P4~P7

北海道史研究家の関秀志さんが、HAL 財団主催の「大地の侍」上映セミナーでお話しした講話要旨をご紹介します。

●当 ACADEMY 会員近況紹介:P7~8

ACADEMY 会員が取組んでいる活動などについてご紹介します。



(蘭越町立蘭越小学校)



(蘭越町立昆布小学校)

日本自治 ACADEMY 15 周年記念 事業「北海道の公立小学校に北 海道マップパネルを飾ろう!」プロ ジェクトついて (写真:蘭越町広報 課提供)

日本自治 ACADEMY では、設立 15 周年を記念して、2021 年度から、B1 サイズの北海道マップパネルを北海道内の希望する小学校へ寄贈する事業に取組んでおります。

今年3月9日、熊谷理事長が蘭 越町内小学校2校を訪問し北海道 マップパネルを寄贈させていた だきました。

熊谷理事長からは、児童さんに「マップパネルを校内に掲示していただき、自分たちの住んでいる北海道内の市町村に一層関心を持っていただきたい」とお話ししました。

日本自治 ACADEMY 事業報告

「北海道の公立小学校に北海道マップパネル を飾ろう!」プロジェクトについて

村上 龍一(日本自治 ACADEMY 事務局)

NPO 法人日本自治 ACADEMY は、地方自治制度やその運営に関し、アジアを含む世界の自治体等との交流及び学術的研究を通じ、今後のあり方や国際化の方策を探り、地方自治の発展に寄与することを目的とし、社会的認知と組織の強化を図るために、平成19年(2007年)特定非営利活動法人を取得し、今年で設立15周年を迎えます。

日本自治 ACADEMY の 15 年の活動の中で 2010 年度から毎年継続している事業「北海道マップ無償配布事業」については、北海道の子どもたちが「ふるさと・北海道」を思い、活力ある地域づくりを目指して行くため、北海道の地理を認識し、郷土愛が生まれることを目的に北海道共通のオリジナルマップを制作し、「北海道の子ども応援プロジェクト」として、北海道公立小学校第3学年、第4学年の全児童へオリジナルマップの無償配布事業を行っています(2021年度で累計1,400,000名の児童へ配布)。

この「北海道の子ども応援プロジェクト」では、 CSR 企業を募集し、ご賛同頂いた企業のロゴマーク、企業名をマップ上に印刷して全道小学校へ無償配布を行っています(北海道銀行様、北洋銀行様ほか多数企業にご参加頂いております)。

2021年度、日本自治 ACADEMY が設立 15周年を迎えるにあたり、15周年記念事業として「北海道の子ども応援プロジェクト」活動を拡大し、全道公立小学校(公募対象 986 校)へ市町村別北海道区域図(B1サイズ・パネル入)の寄贈事業を実施出来ないか、との意見が理事会の中であり、検討した結果、「北海道の公立小学校に北

海道マップパネルを飾ろう!」プロジェクトを 展開する事業計画を作成し、2021年度、2022年 度の2年間で120校へマップパネルを寄贈する 運びとなりました。

本事業の実施に当たり、後援していただいた 北海道教育委員会、札幌市教育委員会のご協力 を頂き、2021年11月~12月末までの期間、全 道公立小学校986校へ事業実施概要及び寄贈申 込用紙を配布したところ、全道公立小学校128 校から北海道マップパネルの寄贈申込がありま した。

事業計画では応募多数の場合、抽選で 120 校へ寄贈する予定で準備を進めて参りましたが、寄贈応募校と寄贈予定校との差が少ないことから、2021 年度事業として 22 校、2022 年度事業として 106 校の計 128 校の応募校全てに北海道マップパネルを寄贈させて頂く事に決定いたしました。

2021 年度寄贈校 22 校について、3月9日に 熊谷理事長が蘭越町内の2校(蘭越小、昆布小) にマップパネルを持参したのをはじめ(表紙写 真)、20校は、宅送で、北海道マップパネルの寄 贈をさせて頂きました。届いた小学校から北海 道マップパネルと児童が一緒に撮影された写真 が届いております(日本自治 ACADEMY ホーム ページ、http://www.japan-a-academy.jpに写真 を掲載しています)。

15 周年記念事業の後半となる 2022 年度寄贈校 106 校については、各学校へ 9 月中旬頃にお届けできるよう準備を進めて行きたいと考えています。

また、寄贈に関し、各小学校からお礼状や写真 をいただいておりますので、次にご紹介いたし ます。

(お礼状など))

○松前町立小島小学校

(3年児童)

・社会で習った市町村が大きな地図になって見 やすかった。毎日見て覚えたいです。

(4年児童)

・北海道の市町村の位置がよくわった。振興局が 色分けしてあって分かりやすかった。

○伊達市立関内小学校

・昨日、北海道パネル届きました。大変大きく 綺麗な地図で驚きました。社会科など様々な勉 強で活用できそうです。ありがとうございまし た。

○札幌市立美園小学校

・このたびは、北海道パネルを寄贈していただきましてありがとうございました。早速、校内に掲示させていただきました。4年生が北海道の学習に取り組んでいるので、4年生の教室に近く、沢山の全校児童が見やすい場所を選定し掲示いたしました。なお、このことについては、本校ホームページにも掲載させていただきました。

○旭川市立江丹別小学校

この度は、本校に「北海道マップパネル」及び「見て知る地図情報 DATABOOK」をご寄贈頂き、ありがとうございました。

本校では、今年度は社会科の学習を特別教室で行っておりますので受け取り後すぐに壁面に設置し、学習に活用させていただきました。新しい大きな地図を子どもたちは目を輝かせて見つめていました。市町村名がはっきりと大きな字で書かれていて見やすいこと、また、振興局単位で色分けするなど工夫されていて、社会科の学習にもすぐに役立ちそうなことなど、随所に様々な工夫がなされていて素晴らしいと思います。綺麗に額装されているので、これから長く大切に使用させていただきます。

この地図を使って子どもたちがさらに地理 の学習への興味関心を高めてくれることを期 待しているところです。

まずは、略儀ながら書中をもって御礼申し 上げます。

時節柄、皆様におかれましてもくれぐれも ご自愛下さい。

((写 真))



(札幌市立東川下小学校)



(旭川市立正和小学校)



(松前町立松城小学校)

以上、紹介させていただきましたが、熊谷理事長が、蘭越町内の小学校にマップパネルを持参した際に、先生、児童の皆さんから、「マップパネルを目立つ所に掲示し、北海道の広さや市町村の位置をみんなで学んでいきたい」との話があったとのことでした。この寄贈時の模様は、3月10日の北海道新聞地域版(小樽・後志)で紹介されています。(了)

講話紹介

2021年 7 月に、農業振興を通じた社会貢献に 取組んでいる HAL 財団が、北海道史研究家の 関秀志さんをお招きし、札幌市内で、映画「大地 の侍」の上映セミナーを開催しました。関さんに、 この時の内容を当 ACADEMY 会報誌に掲載する ことを快くご承諾いただきましたので、その要旨 をご紹介します。

「大地の侍」と明治初期の 北海道士族移住・開拓

関 秀志 氏

関 秀志(せき・ひでし)氏のプロフィール

北海道史研究家。北海道史研究協議会副会長。元北海 道開拓記念館(現北海道博物館)学芸部長。専門は北 海道近現代史で、60年以上にわたり北海道の地域史、 開拓史などの研究に取組む。「北海道の歴史 下(近代・ 現代編)」(共著、北海道新聞社)ほか著作多数。最近、 北海道開拓の実態を対話形式の講義で、楽しく、分かり 易く紹介した「北海道開拓の素朴な疑問を関先生に聞い てみた」(亜瑠西社)を出版。

はじめに

私が今回の映画の原作となった本庄陸男の「石狩川」に出会ったのは、学生時代に、「明治初期の失業士族たちの北海道移住と明治政府の北海道開拓政策」をテーマにして卒論を書いた時ですから、もう六十数年前になります。

そして、映画と実際に出会ったのは、二十数年前ですから、比較的新しく、その時は、先ほどHAL財団理事長の磯田さんがおっしゃったように、フィルムはかなり劣化しておりました。今回、映画が上演されるということを伺いまして、大変懐かしく、うれしく思っているところです。

それはなぜかというと、原作の本庄陸男の「石 狩川」は明治初期の東北・北海道が舞台で、その 時代は日本や北海道にとって、かつてなかった ほどの時代の転換期でありました。原作や映画 作品は、その転換期の様子を克明に描いた非常 に歴史的にも優れたものであると昔から思って いました。

限られた時間ではありますが、この映画の時代背景をお話することにより、映画の理解に少しでもお役に立てればと思っております。

北海道移住の背景

この明治初期というのは、二百数十年続いた 徳川幕府を頂点にして各地に藩がおかれた封建 社会、歴史学では幕藩体制といいますが、それか ら近代的な国家に転換する激変の時代でした。

その転換の中で、特に重要だったのは、慶応4年(明治元年)~明治2年の箱館の五稜郭戦争まで続く、いわゆる戊辰戦争という内戦でした。これは、新政府と、今の新潟県を含む東北の諸藩との対立で、その中心となったのが、会津藩であり、今回の映画にも深く関わる仙台藩であったわけです。

戊辰戦争は反政府軍が敗れます。当然、全国の 諸藩の中でも、戊辰戦争で政府と対立した諸藩 が真っ先に重い処分を受けることになります。

具体的には、石高を大削減されたり、藩を潰されたりするわけです。仙台藩は62万石という全国でも有数の大藩だったのですが、半分以下に削減されますし、会津藩は、さらにひどくて、藩が潰され、その後、今の青森県に斗南藩3万石を認められるというような結果となります。

北海道に目を向けますと、五稜郭戦争が終わった後、明治新政府は手を付けようと思っていた北海道の開拓に本格的に取り掛かります。

なぜ新政府が早くから北海道開拓を計画した かというと、国際的な情勢からです。当時はロシ アが北方から南の方へ力を伸ばしてきて、幕末 の条約で、日本とロシアの境界については、千島 の方は国後(くなしり)、択捉(えとろふ)までは日本の領土となっていましたが、樺太は国境線が引かれずに、日本人とロシア人の雑居となっていて、トラブルが続いていました。

それで、日本を守るためには、北海道を早く開拓して、本州に近い社会を作らなければならないというのが、国防上からの北海道開拓に関する新政府の考え方でした。

そのようなわけで、五稜郭戦争後の明治 2 年 7月、新政府は北海道開拓を進めるために、開拓 使を置くことになります。最初は東京にあって、 それから箱館を経て、明治 4 年に札幌に移って きます。

開拓使の開発政策

北海道開拓をするためには、一般的なことですが、3つの条件がありました。一つは、事業を行うための資本、資金、二つ目は、人、労働力、三つ目は、技術です。

それで、まず開拓使は、お金の方はまだ新政府ができたばかりなので余裕がなく、明治 2 年に全国の諸藩に、北海道の領地を与え、警備と開拓を行うように命じました。この制度は明治 4 年に廃藩置県が行われ、終わりを告げます。その後は直接新政府が北海道開拓を一手に進めることになります。

それから、労働力の問題ですが、当時としては、 本州から北海道に開拓者を移すしかなかったわけです。ただ、人はいくつか条件がそろわないと動かないわけで、本州側の条件と、受け入れる北海道側の条件が結びつかないと、北海道に人は移動しません。

明治の 20 年代以降になると、黙っていても、 毎年3~5万人ぐらいの移民が北海道に押し寄せるようになります。しかし、明治初期にはまだ新政府ができたばかりで、農民が土地に縛られているという社会構造は変わっていませんでしたので、新政府が奨励しても、農民はなかなか自由に北海道に行くことはできない状況でした。

それで、新政府の行うことは、保護移民しかな

かったわけです。具体的には、3年間は食糧を与える、移住費用を出す、小屋掛料や家具、農具も与える、そのような保護移民の制度を採用しました。

それから、もう一つの技術の問題。それまで、 日本では、本州と気候風土の異なる北海道のような土地で大規模な開発計画を経験したことがありませんでした。日本の在来技術でやれないとすれば、外国の技術を導入しようということで、欧米の技術、特に開拓使は、アメリカ合衆国に目を向けまして、アメリカの開拓の経験を北海道の開拓に活かせないかということで、たくさんの専門家を雇い、様々な分野で開拓を試みていくわけです。

開拓という事業は範囲が広くて、伐木開墾から農業経営まであります。営農で言うと、北海道に適した作物をまず見つけなければなりません。それから、本州と違って北海道は生産性が低いですから、経営面積を広げる必要がありました。今なら機械化ですが、当時は家畜、特に馬を導入し、馬に農機具を引かせて作業効率を上げました。馬などの家畜の活用は、その堆肥によって地力を維持することにもなります。

そのほか、農業の面では、新しい農業を北海道に導入するためには、青年たちに技術を身に付けさせる必要があるということで、気候の異なる東京の青山や、函館、根室の周辺に官営の農業試験場や牧場を作り、そこで外国、特にアメリカの農業技術を試し、そこに青年たちを集めて、いろいろな訓練をしました。

また、農家が作物を作ってもすぐ売れないこともあるので、加工することにより販路を広げようということで、官営工場で農産物加工を行っております。

今回の映画は、仙台藩の岩出山から現在の当 別町に移った開拓団が主人公ですが、この時代 には、当別だけではなく、道内各地に失業した士 族の団体が入っています。それに共通すること は、新しい農業の試みに取組む場合に、その開拓 団が、現在で言うと、試験場のような役割を果たしているということです。

それが、明治 20 年代以降の急速に進む北海道 開拓の基礎となっています。ですから、明治以降 の北海道の近代史をみてみますと、だいたい北 海道の開拓がいろいろな失敗と成功を重ねなが ら、軌道に乗るのに、20 年ぐらいかかったとい うのがわかります。その試行錯誤の時代を支え たのが、明治初期の士族の開拓団です。

当別までの道のり

今回の映画ですが、仙台の岩出山から厚田の 聚富(しっぷ)に入るわけです。これは当別に入った人たちだけではなくて、それと似たような 例は、明治以降、至る所で経験しています。最初 にいいと思って入っても、そこは農業に不適で また再移住するということはしょっちゅうあり ました。当別の人たちも例にたがわず、最初に入った厚田の聚富は農業に不向きなことは、ご存 知の方がおおいと思いますが、それでいろいろ と苦労を重ねて、当別に再移住をしたのですが、 当別の開拓が本格化する前に、この映画は終わるわけです。

類似の士族移住の例

次に、今回の映画と似たような士族移住の例をご紹介します。まず仙台藩からいいますと、規模からみて一番大きかったのは、今の宮城県亘理から、殿様と家臣団が入ったのが有珠郡、今の伊達市です。明治以降、開拓の模範村となったところで、何かと引き合いに出されるのがこの亘理と当別です。

それから、宮城県の白石から入ったのが、今の 登別市内の幌別という村です。そして、札幌の白 石、これは出身地の名前をそのまま使ったわけ です。手稲にも入ります。

さらに、宮城県の角田から室蘭に入ります。こ この人たちは再移住して夕張郡の角田村、現在 の栗山町に移ります。

それから、会津の人たちが余市に入りまして、

余市の農業の基礎を作ることになります。余市 はリンゴの栽培が盛んですが、その基礎を作っ たのは会津の開拓者です。

このほか、明治維新の時に、新政府側につきましたが、本藩と対立して、新政府の援助で北海道に移住した、ちょっと例外的な開拓団もあります。今の淡路島は、徳島藩の領地だったのですが、ここの洲本に稲田家という城代家老がおりまして、主従が日高の静内に入ります。

そのようなところが、今回の映画の時代とほ ぼ同じ時期に北海道に入った士族たちです。

それで、少し後の明治 10 年代になり、新政府の禄の処分が全国に及んだ結果、士族の失業が全国の大きな社会問題となります。この問題を解決するために、士族授産政策が進められました。

この政策の一環として、失業した武士たちの一部が、政府の後押しで、北海道に広大な土地を与えられ、移住してくるということになります。

その代表的な例を二、三あげますと、有名なのは名古屋藩です。この徳川御三家の家臣団が、八雲に入りました。明治以降の開拓の模範となったところです。

それから、加賀の前田の家臣団が岩内の隣りの前田村、今の共和町に入りました。それから、 余市の隣りの大江村、今の仁木町には山口藩、毛 利家の家臣団が入ります。

それから、一番数も多くて、その後に大きな影響を与えたのが屯田兵です。最初、屯田兵は明治8年に琴似に入りますが、初めの頃は東北地方の武士たちが中心でして、明治32年まで北海道に入るわけです。

そのような違ったタイプの武士の開拓団が、 この映画よりも 10 年ぐらい後になってから、北 海道に入って来たのです。

移住者の困難と成功の要因

当時の開拓者たちが、共通して苦労したことは、一つは、資金が乏しいということです。明治

維新で失業し、あるいは戊辰戦争で処分を受けて、全て失った人たちが多いわけです。もう一つが、移住できた士族の多くは、伐木開墾に不慣れだったということです。小規模な農業を経験している士族もいましたが、城下に住んでいた多くの武士は、農作業はほとんど経験がありませんでした。それから、これは一番大変なことかもしれませんが、一体北海道でどういうふうにして農業をやれば成り立つかということです。いろいろな開拓者が失敗を重ねながら、明治の半ば以降になって、ようやく、北海道農業の方向が掴めてきたのです。

このような中、土族の開拓団が成功した理由は、意外に思われるかもしれませんが、殿様や家老と家来が一緒になって移住してきたことです。この封建的な主従関係の中、殿様や家老が逃げ出さないでいるのに、家来が逃げ出すわけにはいかないといった雰囲気の中でがんばった土族たちが少なくありません。

それから、士族は農民たちと違って、農業には 不慣れですが、逆に、本州と同じやり方ではいけ ないということで、開拓使が奨励した新しい農 業をどんどん試みていきました。そして、リーダ ーシップです。 当別や伊達の家老クラスのリー ダーたちが非常に優秀で、彼らは、後に、開拓使 の役人にもなります。 士族開拓団の全部が成功 したわけではありませんが、成功の陰には、今お 話ししたような理由があります。

この時代に全道各地に失業した武士たちが入植して悪戦苦闘し、その経験がその後の北海道開拓に生かされてきたということを最後に申し上げて、私のお話を終わらせていただきます。 (了)

当 ACADEMY 会員近況紹介

映画「大地の侍」 北海道巡回プロジェクトについて

真藤 邦雄(日本自治 ACADEMY 会員)

私は、現在、HAL財団(農業振興を通じた社会貢献に取組んでいる一般財団法人)が取り組んでいる『映画「大地の侍」北海道巡回プロジェクト』に参画していることから、その内容について、皆様にご紹介したいと思います。



©東映

この映画(1956年公開、東映)は、明治維新の際に、旧幕府軍と明治新政府軍とが戦った~戊辰戦争~その戦いに敗れ、領地や俸禄を失った仙台藩岩出山の伊達家主従が、遠く土地を求めて、北海道、当別の地に移住するまでの困難を描いた作品で、当別町出身の作家、本庄陸男の「石狩川」の小説が原作となっています。

この映画、当別までの移住を描いた作品では ありますが、ここに描かれた様々な困難という のは、北海道に移住してきた私たちの先祖が等 しく経験した困難であったろうと考えており、 そこには一種の普遍性があるものと考えていま す

そして、今、こうして豊かさを享受している私 たちが、この映画を通して、この困難な時代を知 り、この時代に学ぶということには大きな意義 があり、また、これからの北海道、とりわけ北海 道の農業の未来を描いていく上で、大きな示唆 を与えてくれるものと考え、現在、広く全道での 上映プロジェクトを進めているところです。

このプロジェクトを進めるに至った経緯について、触れさせていただきます。今から 10 数年前になりますが、私どもの財団の理事長 (磯田憲一さん)が、この映画を見る機会があり、大きな感銘を受けて、是非これを広く普及させたい、との思いを持ったのが発端になります。

当財団は、一昨年(2020年)、財団の事業を大きく見直し、公益的な事業に特化した団体として再出発いたしました。そして、新たな財団の象徴的な取組の一つとして、この映画を蘇らせようということになったわけです。

ただ、磯田理事長が 10 数年前に見た際にも、 既にフィルムの劣化が進んでおり、現状ではと ても上映には耐えられないものとなっていたこ とから、版元である東映に働きかけ、DVD 化を お願いしたわけです。

当初の東映の反応というのは冷ややかなもので、なかなかラチが明かない状況が続いたわけですが、理事長自らが手紙を書くなど、粘り強くこちらの狙いを伝えてきたところ、ようやく、昨年(2021年)1月になって、マスターフィルムからのDVD化が実現し、今日に至っています。

この映画、65年前に作られた、ということも あって、今の私たちが見ると理解が難しいとこ ろもありますが、事前に時代状況などを学習し ておくと、理解を深めることができ、一層興味深 く見ることができます。

HAL 財団では、このプロジェクトに応援をいただいている 10 の企業・団体(エア・ウォーター、セコマ、町村農場、良品計画、北洋銀行、北海道銀行、六花亭製菓など)の協力を得、また、

この取組に賛同していただいた多くの団体・個人の皆様のお力添えをいただき、これまで、映画上映の際に、当時の時代も学習するという「大地の侍」上映セミナーという形式を基本として、取組を進めてまいりました。

今年(2022年)3月末現在、特別試写会も含めると、計29回(8市町)、上映セミナーを開催し、1,000人を超える道民の皆さんの参加をいただいています。

上映セミナー終了後には、「伊達家主従の行動などを通してリーダーシップについて考える大変良い機会となった」「生まれも育ちも北海道の私にとって、フロンティア精神を思い出す良い機会となった」などの感想が寄せられました。

今後、HAL 財団としては、この映画をより多くの皆様にご覧いただきたいと考えており、現在、上映セミナーを企画する地域や団体を募っております。お問合せをお待ちしております。

【本プロジェクトに関する問い合わせ先】

......

HAL 財団 (札幌市中央区南1条西10丁目 南一条道銀ビル4階)

TEL: 011-233-0131 (平日 9:00~17:00) ホームページ: http//www.hal.or.jp

メール: samurai@hal.or.jp

【編集後記】今号の会報誌では、当ACADEMY設立15周年事業として実施している「北海道の公立小学校に北海道マップパネルを飾ろう」プロジェクトの中間報告をさせていただきました。また、農業振興を通じた社会貢献に取組んでいるHAL財団が、2021年度から取り組んでいる「大地の侍」上映セミナーにおいて、映画上映に先立ち、北海道史研究家の関秀志さんが行った講話要旨を紹介させていただきました。関秀志さんには、本誌への掲載にご協力いただき、どうもありがとうございました。

(日本自治ACADEMY事務局一同)